

第2部 ロンヴェーク遺跡の調査報告

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯

ロンヴェーク遺跡は、ポスト・アンコール期カンボジアの王都である。土塁と堀に囲まれた16世紀の王都の存在はこれまでも認知されていたにも関わらず、本格的な考古学調査がされることはなかった。アンコール王朝末期からポスト・アンコール期にかけては、隣国からの侵略と内政不安とで、カンボジア史の中でもとりわけ複雑な時期にあたる。アンコール以降、王都はスレイ・サントー、プノンペン、ロンヴェーク、ウドンと点々と遷り、国内情勢も不安定であったとみられる。そのためアンコール王朝末期からポスト・アンコール期にかけては、暗黒の時代といわれるほど、その実態が分かっていない。本プロジェクトは、まさにこの暗黒の時代にあたる15世紀から16世紀を主な対象としている。本報告は、王都ロンヴェークにおける初の考古学的調査報告であり、今後更なる調査に向けての基礎的な資料集としての役割も兼ね備えている。

平成22年度から平成24年度文化庁伝統文化課所管の文化遺産国際貢献事業（文化遺産国際協力拠点交流事業）「カンボジア・ウドン遺跡及びロンヴェーク遺跡等の保存に関する拠点交流事業」において、奈良文化財研究所はポスト・アンコール期の王都ロンヴェーク遺跡とクラン・コー遺跡の考古学的調査をおこなった。調査に際してはカンボジア王国文化芸術省、プノンペン王立芸術大学考古学部協力のもと、遺跡踏査・探査ならびに人材養成事業を実施した。ロンヴェークにおける調査は3次にわたっておこなわれた。主な調査参加者は本報告8ページに記載されているのでそちらを参照されたい。

第2節 調査の概要

第1次調査

平成23年7月29日から8月1日にかけてロンヴェークにおいて調査をおこなった。ロンヴェークは東西約2km、南北約2.5kmの土塁に囲まれており、遺跡の範囲が広大である。このため、本格的な遺跡踏査に先立ち、日本治水福岡の西田健典氏に依頼し、マルチローターヘリを用いた空中写真撮影を実施した。撮影は、ロンヴェークの北西隅、西辺土塁中央部、南西隅、北東隅、トゥオル・バイヨーク寺院の各地点においておこなった（第45図、46図）。土塁と土塁の間にはもともと堀が走っていると考えられるが、現在は村人により水田として利用されている。撮影当時は雨季に入っていたため、水田に水が張られ、土塁と堀の様子が空中撮影によって明瞭に区別できる状態であった。また、ロンヴェーク東辺には土塁は存在しておらず、トンレサップ川の氾濫原に面していることが判明した（第51図）。つまりロンヴェークは洪水の被害に遭いにくいやや高い土地を選んで形成されたものとみられる。



第45図 ロンヴェーク西側土塁と堀



第46図 ロンヴェーク南西隅土塁

第2次調査

平成24年1月9日から12日にかけて、ロンヴェーク南側の踏査をおこなった。すると南辺土塁の周辺に数々のマウンドが存在することが判明し、いくつかのマウンドでは遺構や遺物を確認した。このため、便宜的にマウンドに番号を付し、インヴェントリーを作成したうえで、2号マウンドと、1号レンガ遺構において小規模なトレンチ調査を実施した(第47図、48図)。その結果、2号マウンドにおいて設定したトレンチからは遺物は検出されず、自然のマウンドを利用して何らかの活動がおこなわれていたと推定される。1号レンガ遺構においてはマウンド上にレンガ構造物が構築されていた。既にレンガ構造物は崩壊が激しく(第49図)、盗掘坑も見られたため(第50図)、レンガ構造物の前面にトレンチを設定した。トレンチからは目立った遺物が発見されることはなく、土器片が数点出土したにとどまったが、マウンド周辺から明青花を採集した。

第3次調査

平成24年8月13日から16日にかけて、ロンヴェーク遺跡全体の遺構・遺物分布を把握する基礎的なインヴェントリー作成のため、遺跡内の踏査を開始した。手法としては、基礎情報を記録するためのインヴェントリーシートを作成することとした。これを基に遺構や遺物を確認した地点のGPSや遺物種類などの情報を記し、情報の蓄積を心掛けた。踏査の結果、総数53地点においてデータを収集した。

第4次調査

平成24年11月30日から12月3日にかけて、ロンヴェーク遺跡のインヴェントリー作成のため、遺跡内の踏査をおこなった。踏査によってさらに41地点データの収集に成功し、合計94地点において遺構ないし遺物の分布を確認するに至った。しかし、今回までの調査でロンヴェーク遺跡内全範囲を網羅できておらず、今後継続的な踏査が必要である。



第47図 2号マウンドの調査



第48図 1号レンガ遺構の調査



第49図 1号レンガ遺構



第50図 1号レンガ遺構盗掘坑